

自由研究発表 1

日本の中等教育における部活動の役割

Dr.Peter Cave (Hong Kong University)

1. はじめに

私が本研究に取り組みましたきっかけは、1987年から1990年にかけて近畿地方の高等学校に英語指導助手（AET）として勤めていた時にさかのぼります。私は、三年間そこで英語を教えながら、日本の学校では、部活動が様々な面において、いかに重要な役割を果たしているかが分かるようになりました。ですので、イギリスに帰国してからも、オックスフォード大学の博士課程におけます論文のテーマで、この「部活動」を取り上げることにしました。1991年から1992年にかけて、一年間京都大学で留学している間、近畿地方の学校6校（中学校2校、高等学校4校）で部活動の研究取材をしていました。14の部活動を見学し、教員23名、生徒46名に面接調査を行いました。そこでも、英語指導助手のころの実績をいかすことができました。また1995年から1997年にかけて文部省の研究所奨学金をもらい、小学校・中学校における研究の一部として、一つの中学校での部活動を研究対象として取り上げたのです。以前と同じように練習を見学し、そこでも教員や生徒に面接調査を行いました。また1996年度一学期に、ほぼ毎日ですが中学校の陸上部の活動に参加しました。なお、今年の1月には、1992年に取材した高校4校（普通科2校、職業科2校）に再度もどって、現在の部活動の状況を調べました。

2. 本研究の背景

日本の中学校・高校に勤務しておりますと、部活動がとても重要な役割を果たしているかに気づかざるを得ないでしょう。たとえば、イギリスの公立学校のクラブ活動と比較しますと、そこには大きな違いがみられるのです。ですが、私の知っている範囲の限りでは、部活動を対象にした研究が極めて少ないのではないかと思います。それは日本のみならず、諸外国のクラブ活動に対する研究に関しても言えることだと思います。世界中の教育学者は「教育」を正式な学校制度や教育課程のことと考え、それ以外の教育や教育的活動に関心を払わない傾向があるのではないのでしょうか。しかし、学校制度や教育課程以外にも、子供の発達に強い影響を与える教育活動が大いにあると思われまます。アメリカの文化人類学者Thomas Rohlen（トーマス・ローレン）はすでに25年前に、宗教組織や軍隊の教育活動、またスポーツトレーニング、精神療法などが学校外の教育的活動として有意義であることを示唆したのです。部活動は、校内の活動でありながら、課外活動として、教育学者の対象となることは少ないのです。

3. 部活動の意義：三つの観点から

本研究においては、部活動の意義を三つの観点から考察したいと思います。

- (1) 生徒は部活動を通してどのようなことを身につけるか。
- (2) 学校組織の中で、部活動はどんな役割を果たしているか。
- (3) 日本の部活動を諸外国のクラブ活動と比較すると、どんな共通点・相違点があるか。

(1) 生徒の立場から見た部活動

部活動という経験から生徒は何が得られるのであろうか。とくに三つの事を重視したい。

- 1) まず、部活動は生徒にとって友達作りの場であるのです。とくに運動クラブや吹奏楽部などでは、練習の回数や厳しさのためによって、友情関係が深まると言えるでしょう。この点に関して、イギリスのクラブ活動は対照的であります。イギリスにおける公立学校のクラブ活動は、普段週一回か二回しか行われないので、親密な友情関係が育つ可能性が比較的低いと言えるでしょう。イギリスの中学校では、友達作りの場としては、学級での諸活動が圧倒的に重要であるのです。それに対して、日本の中学校・高校では、学級だけでなく、まさに「クラブ活動」という友情関係を築く場があるのです。とくに注目すべきは、部活動では学力レベルの異なる友達が作れる可能性が十分あるということです。周知のように、イギリスの学者が書いた学校のエスノグラフィーの大きなテーマの一つは、生徒の分極化（polarization）に関するものであります。David Hargreaves, Colin Lacey, Paul Willisなどによると、生徒が進級するにつれて、学力レベルの異なる生徒の間での友情関係が少なくなるという事実があるのです。その点、日本の中学校では、部活動があるためそういう友情関係を保てる可能性が高まるかと思われます。
- 2) 次に、学校での部活動では、ここの生徒が精神面の発達や、また社会性などを学ぶことができるのです。岸本氏が述べるように、「部活動は...生徒にとって、友情や連帯感・協調性をはぐくみ、自己の存在を見つめ、努力や忍耐、責任と思いやり、集団生活のルールなどを身につける場」とされています。とくに、クラブの顧問が指導にあたらぬ日が多いので、2・3年生はリーダーシップをとる力や後輩を指導したり、また秩序を保つ力を身につけなければならないのです。それは、人間的成長において重要な体験であると思われます。また、日本社会に広く見られる上下関係を、部活動を通して、はじめて経験する生徒が少なくないでしょう。大人の社会に必要な礼儀や振る舞いなどを部活動を通して学んでいくのです。
- 3) また部活動は達成感や成就感を体験する場でもあるのです。とくに教室で自分の力（個性）が出せない、学習が嫌いな生徒の中には、この部活動によって救われた子がたくさんいることでしょう。もし学校が、教科学習の場しかならなかつたら、達成感や成就感をほとんど味わうことのない生徒が多数いることは間違いないでしょう。様々な部活動によって、現在の中学校・高校には、運動神経の発達した生徒や、またスポーツをになる生徒がいることが確認されてい

るのです。

(2) 学校・教員の立場から見た部活動

もちろん教員の立場からも、部活動の教育的重要性が私的されているのです。しかし、また部活は、生徒指導や学校管理に関しても、重要な役割をになっているのです。

日本の中学校・高校では、生徒にたいする懲罰が、比較的に少ないということが分かっているのです。その一方で、イギリスの中等学校では、学級での学習のための居残り (form detention)、留年 (year detention)、学校居残り (school detention)、スクール・リポート (school report)、停学、退学などの懲罰が、生徒の過失の度合いによって細かくランクづけられているのです。日本の中学校には、先生にしかられるとか、また厳しい場合でも、停学処分しかないでしょう。生徒指導という観点からは、ルールを破った個人だけを罰することより、その個人をグループに結びつけ、グループの連帯感や団結力を通して個人を更正するという指導方法に基づいているのではないのでしょうか。主にこの役割をになうのが、学級とクラブなのです。クラブの場合は、生徒に健全な達成目標や安定した生活習慣を身につけることを念頭においています。アメリカの研究者Gerald Le Tendre が指摘しているように、アメリカでは生徒が問題行動を起こした場合、クラブ活動に一時的に参加できなくなるのです。それに対して、日本の教員は問題を起こした生徒を他のクラブの生徒たちと、より強く結び付けようとする傾向があります。

クラブ活動を通じて、先生と生徒とのつながりも、さらに強くなる場合もあるのです。教室では生徒が自らが望むことをしているとは限らないのですが、部活動では、部員全員が自分の選んだ活動に取り組んでいるのです。顧問の教員の目標と、生徒の目標が一致することが多いと言えるのです。また、学習指導をする場合には、先生に時間的な制約があるので、十分に生徒と時間を過ごしたり、話したりすることができないのです。一方、部活動では、休憩する時間などがあって、顧問の先生が教室ではみせない、別の顔を見せることが可能なのです。最後にある高校教員の言葉を引用すれば、部活動を一生懸命する生徒は「悪い事をする暇はない」。それに、とくに運動部で毎日練習している生徒はかなりの気力を部活動で使い果たすので、余っているエネルギーを「不健全」な方向に発生する恐れが減ると言えるのです。

(3) 諸外国のクラブ活動との比較

外国のクラブ活動に関する研究は少ないのですが、とくにアメリカの学校のクラブ活動に関して若干の研究があるのです。現時点に置かましても、本格的な比較考察はまだ資料不足のために困難を有しますが、ここでは実験的に比較検討してみたいと思います。Donna Eder, David Kinney, Don Merten などの研究によると、アメリカの中学校・高校では、生徒同士の地位がクラブ活動の人気度と深く関連しているのです。男子の場合、バスケットボールやアメフトのレ

ギュラーは生徒の間に地位が高いのです。女子の場合は、チアリーダーの地位が最も高い。その理由は、男子スポーツの試合の人気にあるのです。数百年生徒や保護者が、男子バスケットボールなどのチームを応援に行くことに対して、女子バスケット・チームの応援に行く者はほとんどいないのです。ですので、男子チームのレギュラーや、応援団のチアリーダーが人気者になりがちです。一方、日本では、高校野球以外は、スポーツが優秀な生徒が人気者やスターになる可能性が比較的に低いと言えるでしょう。（最近ではJリーグの影響でサッカーをする生徒の人気も高まっているのですが・・・）。

イギリスのクラブ活動に関する研究はほとんどないのですが、私の個人的な印象としては、イギリスの公立学校のクラブ活動は、日本の部活動と比べますと、ほとんど厳しさを伴わないものだと思います。イギリスの公立学校のクラブは、普通、週一回か二回ほどしか活動しなく、練習の長さも厳しさも日本の部活動とは比べ物になりません。夏、冬、春休みの大半を同じクラブ活動に費やす日本の生徒たちとは違い、イギリスではスポーツが季節によって変わります。秋、冬はサッカーやラグビーをし、夏はテニスやクリケットをする。また、生徒は二つ以上のクラブに入ってもいいのです。スポーツが得意な生徒が運動能力を生かせるというよい面もあるのですが、一方で、その生徒が複数のチームのレギュラーになるので、意外と生徒の達成感が小さくなるのではないのでしょうか。各クラブの練習時間が短いので、通常生徒は、特定の能力を発展させる機会を失うこともあるのです。ですので、運動能力が相対的に低い生徒や、またスポーツに自信のない生徒などは、クラブには入らないことがあるのです。これに対して、日本の部活動では、努力することが評価の対象になるので、どのような生徒にとっても部活動への参加が、比較的かんたんなものになっているのではないのでしょうか。

4 今後の部活動

私が今年、近畿地方で取材した時には、クラブ部活動に参加している生徒数が減少傾向にあるとよく聞きました。とくに高校ではその傾向が著しいようです。9人しか部員がいない為に、試合の時には、別のクラブから部員一人を借りるソフトボール部もありました。顧問の先生の話によると、部活動への参加が消極的になっているのには、主に二つの理由があるということです。第一に、生徒が「しんどい」ことをするのを嫌う傾向があるためであり、また二つ目としては、生徒が部活動よりアルバイトに精を出しているためだそうです。この他、学校中心の部活動から地域社会中心の部活動を選択する動きも出始めているのです。それは、一般的には正規の学校中心型の部活動が活性化しないことが原因しているのです。もし、クラブ同士の試合が成立しないほどの人数しかいない場合には、他校のクラブ部員と協力することが一つの救済方法なのです。教職員はこうした傾向を支持しているのです。なぜなら地域社会中心のクラブ活動が活性化すると、先生の負担がある程度、軽減されるからなのです。しかし、こうした傾向がどれくらい進むかは明かではないのです。ですが地域におけるクラブ活動が学校の施設を

利用する場合には、依然として学校の教職員の役割も大きいと想定できるでしょう。

地域社会中心のクラブ活動に移行しつつあっても、これまでの学校における正規のクラブ活動の利点を維持することが望まれています。その理由としては（１）どの生徒にとっても参加しやすい活動。運動能力の高くない生徒も大切にしなければならない。（２）各部員が上達できるような真剣な活動。楽しみのためしかない活動では、結局達成感が湧かないのではあるまいか。有意義なクラブ活動が望まれるのです。また、現在の部活動が持っている短所をどう改善すべきであろうか。その点に関しては、三つの提案があります。

（１）文化クラブの活動の充実。

運動クラブと比較して、内容が充実していない文化部が多いようだ。とくにイギリスの学校と比べて、日本の学校では演劇や新聞・雑誌などのような活動があまり学校共同体で重視されていないように思う。こういう活動は生徒の表現力や思考力の促進とつながるので、その充実が望ましい。新聞や雑誌は、総合的学習の優れた作品などを発表する場にもなれるし、オンライン・バージョン（電子新聞・電子雑誌）を作ると、情報技術教育との関係もありうる。

（２）部活動の休日の増加。

同じクラブで週六日か七日練習することが部活動の伝統である。本格的な練習で生徒が上達できるので、少なくとも週四日練習することが望ましい。しかし、週六日以上練習したら、生徒の自由時間がほとんど失われる。ですので、部活動を週四日か五日に制限した方がいいのではなかろうか。あとの二日か三日は、学校と関係のないこととか、別のクラブ活動とか、いずれにしても生徒が自分で考えたり工夫したりして、人生の可能性をより広く探索できる場ができるものと思われる。そうすれば文化部の活動や別の文化的活動に参加する生徒が増えるとも思われる。

（３）生徒の主体性の促進。

部活動は、生徒が主体になり、また生徒の主体性を伸張する場である。中学生・高校生はまだ心身ともに発達途上にあるので、顧問の先生やコーチが生徒の発達段階に応じて指導しなければならない。未成年の主体性とはどのようなべきかについては定義が困難であるが、生徒が自分で考えたり、自分で自分の行動を決めたりするという最終目標からかけ離れた部活動は望ましくないといえよう。終わりに部活動は日本の中等教育の中心的になっており、その教育的役割も大きい。しかし、これまで部活の重要性が教育学者の研究に十分に反映されていないといえよう。今後は、部活動だけでなく、多種の課外教育活動の研究を期待したい。

引用・参考文献

岸本秀章「中学校における運動部活動の研究」関西教育学会第50回記念大会発表1998

Eder, Donna, and David A. Kinney. 1995. 'The Effect of Middle School Extracurricular Activities on Adolescents' Popularity and Peer Status', *Youth And Society* Vol.26 N0.3 pp.298-324.

Hargreaves, David H. 1967. *Social Relations in a Secondary School*. London: Routledge and Kegan Paul.

Kiuney, David A. 1993. 'From Nerds to Normals: The Recovery of Identity among Adolescents from Middle School to High School', *Sociology of Education* Vol.66 (January), pp.21-40.

Lacey, Colin. 1970. *Hightown Grammar, The School as a Social System*. Manchester: Manchester University Press.

LeTendre, Gerald. 1994. *Willpower and Willfulness: Adolescence in the United States and Japan*. D.Ed. Dissertation. Stanford University.

Merten, Don E. 1996. 'Burnout as Cheerleader: The Cultural Basis for Prestige and Privilege in Junior High School', *Anthropology and Education Quarterly* Vol.27 No. 1, pp.51-70.

Rohlen, Thomas. 1986. 'Spintual Education" in a Japanese Bank' in Lebra, Takie S. and William P. Lebra (Eds.). *Japanese Culture and Behaviour: Selected Readings*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Willis, Paul. 1977. *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*. Farnborough, England: Saxon House.